

ひ切つたこともやつてみるつもりだ、といふのだつた。

この事業の意圖が、僕の心を強くとらへたのである。逢つたことも話したこともないのに、この事業の計畫者、指導者たちの建設の精神が僕の胸にちかにふれて來るのを感じた。僕は滿洲に對しては、普通一般の人々の持つてゐる知識と認識以上のものは持つてゐなかつた。ところがこの話を聞いた時に滿洲といふものが急に身近かに感じられて來た。

僕は急に滿洲についてもつと深く知りたいといふ強い願ひを抱いた。東京の妹にたのんで滿洲に關する本を送らせて、一日の労働のすんだあとにわづかな時間を、一心に讀みふけた。概念的な記述が多かつたけれども、それでもなほ新しい國の若々しい精神を感じた。僕等の同時代の青年たち、いろいろな理由で故國では停滞しか感じることのできなかつたやうな人々が、たくさん向うに渡つて、生れ變つた氣持で驥足をのばしてゐる事實も知つた。僕は知ることのおそかつたことを悔いた。

そこでは僕も精神の潤達を感じることができたらう。のびのびと手足をのばすことができるだらう。僕は決して甘い空想を抱いて行つて現地に着くやいなや幻滅するといふやうなものではない。さまざまな困難、とくに半植民地的といつていい土地の空氣も察することが出来る。上部構造の龐大な統制國家における私生活のいろいろな面についても想像することは出来る。しかしそれらがどうであるにしろ、そこには國の上から下までを貫いてゐる理想がある。人々の行動は

その理想によつて統一されてゐる。安んじて身を任すことのできる生活がある。

僕は農場主に向つて、滿洲行きの希望をのべた。夏ぢゆうはこつちに送つて秋に渡滿したいといふ内意を傳へた。

僕は僕の氣持を差當つて身近かなものに傳へたかつた。それで僕はまづ妹に手紙を書いた。妹からはすぐに返事が來た。彼女は僕のために喜んでくれた。兄さんが滿洲へ行くならば、私も一緒に行きたい。信頼すべき女手が兄さんの力となるまではやはり私がそれに代りたい。あの東北の村での時のやうに、と彼女は言つて來た。

しかし最後の行に、彼女がちよつと書き足してゐる文句があつたのである。兄さんの更生の道が今度こそ眞直ぐひらけてゆくことを私は願ひまたよろこんでゐます。それにしてもあの冷害地の部落の人々のことが、かうしてはなれてゐるとひとしほ思はれてなりません。あの人々の今後はなんだかあんまりはつきり眼に見えてゐるやうに思はれるのです、云々。

これは彼女が僕の滿洲行きの氣持に何か納得できぬもののあることを、側面から言つたといふものではないだらう。彼女が、僕が新しい道を見つけたことを心からよろこんでゐることに少しの疑ひもない。彼女はただ懷舊の情にあふれて、これらの最後の數行を書いたのだつた。が、これらの數行は、じつに思ひがけなく、僕の心を強くえぐつたのだつた。僕ははつと心にある目ざめのごときものを感じたのである。

それから数日、仕事でも休み中も、僕はひとつことを思ひつづけてゐた。

負うた子に淺瀬を教へられるのとへのとほり、妹の手紙はあふないところで、ある重大なことに向つて僕の心をかへりみさせたのである。僕は自分の意見が容れられないといふので部落を去つた。新しい建設に向つて進む見込みの立たたぬところに止つてゐても仕方がないといふやうなことを思つた。諸方から流れて来た食ひ詰めたやうな者たちでは素質がわるくて、結局だめだといふやうなことを腹のなかでは思つてゐた。何といふ傲慢であつたらう。

今僕は、僕がそもそも部落生活のなかにはいつて行くやうになつた動機にさかのぼつて考へずにはゐられなかつた。

僕は昔、ある政治上の意見を抱いて農民に向つて宣傳したり、彼等を一定の目的に向つて組織したりしたものだつた。さういふ長年のうちに、僕は自分の考へや行動のまちがひであつたことを悟つた。さういふ人間は僕ばかりではない。同時代の、僕と同じやうな、たくさんの人々がある。あやまりを悟つた多くのさういふ人々の歸つて行つたところはどこであつたか？ 彼等はその古巣へ歸つた。彼等はたいいて歸るべきねぐらを持つてゐる人々であつたから。そしてそこで彼等は彼等の「更生の道」を歩みはじめた。社會的人間として復歸し、社會のさまざまな領域において、積極的に活動しはじめた。

彼等にとつてそれはまことに慶賀すべきことである。しかし彼等が昔、自分に従へと言つてそ

のなかで呼號した農民たちと彼との關係はどのやうなことになるのであらうか？ 會社の幹部になつて「更生」してしまつた彼と、百姓との間には何の關係もない。しかし關係は絶たれてしまつた今も昔の彼の言動はなほ未決濟のままに残つてゐる。彼はつぐなひをしてゐない。會社の幹部としての、「更生」の一日々々は、そのつぐなひの一日々々ではない。自分はまちがつてゐた、といふことだけによつてはそのつぐなひは完了しない。

會社の幹部は一つの例にすぎぬ。しかし多かれ少かれさういふものである。そして僕自身はさういふ更生には堪へられなかつたのである。

八

僕はまちがつてゐたといふ。そして彼等からは離れたどこかよそへ行つて新しい生活にはいるが、僕の言動は、たとひ微力なものであつたとしても彼等の間にさまざまな波紋を残したにちがひはないのである。僕がいろいろな理窟をいひ、やがてどこかへ行つてしまはうとも、彼等はいつまでもそこにさうしてゐる。苦しいからと言つて、自分の思ひが通らぬからと言つて、面白からぬことが多いからと言つて、どこへも行けるといふわけのものではない。彼等はそこにゐて、自分の上にかぶさつてくるものをそのまま被つて、堪へて行かねばならぬのである。

それを思つた時、僕は農村へはいつてゆくことを考へたのであつた。そして川島農場の人間に

なつたのであつた。

その僕が三年ほどで部落を出てしまつた。さきに言つたやうな理由で。しかし、そもそもどんな氣持から農村へはいつて行つたかといふ、今言つた動機に照らし合して見たならば、さういふことは一體理由になるだらうか？ それは形は變つてゐるけれども、「それには堪へられぬ」と言つて自分で否定した道を、自分で行くといふことにほかならないではないか？

ここでは自分の意見が通らぬ。ここには素質のわるいものばかりがある。ところが一方こつちには、新しい國の理想に燃えた人々の間に新しい計畫がある。これこそ自分を生かすべきの地だ、といふのでは自分が否定した人々の精神、行動と少しも變つてはゐないではないか？

さう思つた時、僕はつめたい汗を感じた。さうしてあの壯んな滿洲行きの希望は見る見るさめて行つたのだつた。僕はもう一度、あの三年に一度、五年に一度は、冷害にさらされる三陸地方の農村へ歸つて行かねばならぬと思つた。

さう思ふと僕はゆつくりしてゐることは出来なかつた。僕は今の雇主である農場主に自分の氣持を語つた。そして滿洲行きのことを取り消し、併せて、雇傭計畫期間を約束よりも一ヶ月だけ早く切り上げてもらつたのだ。雇主がどれだけ僕のいふことがわかつてくれたかはわからないが、ともかく僕の申出は承知してくれた。

それにしても僕はもうちよつとのところで再び身をあやまるところだつた。それを未然にふせ

ぐことのできた機會を與へてくれた妹に感謝した。

九月にはいと僕は農場を去り、郷里の町へ歸つて、川島と原口とに自分の決心を告げ、彼等の諒解を得てから津輕海峡を渡つてもとの部落の土を踏んだ。部落へはいつて行つたのは夕方であつた。今年は氣候も順調であつたので、作物のみりも常のやうに見受けられた。途中は部落の誰とも顔は合せなかつた。細谷を訪ねると、突然の來訪に彼はおどろいたらしかつたが、さすがになつかしさをうして迎へてくれた。

一別以後のことを二人は話した。個人經營にはいつてからの彼等の經營はどのやうなものであらうか？ 彼等は種々雑多な方法で資金を工面して、すゐぶん無理をし、苦しんでゐるらしいが、苦しみのなかに今までにない喜びがあるといふ風らしかつた。今のところ彼等は、同じスタートに立つて出發したものの競争心で、元氣づいてゐるといふ風らしかつた。しかし僕は餘り立ち入つて詳しいことは聞かなかつた。

細谷は僕の申出を聞いて、頭をひねつた。それは、僕の部落復歸を喜ばぬといふのではない。僕等は憎み合つたもの同士ではないし、細谷は根が小心な好人物なのである。彼が考へ込んだのは、僕のための住宅は、もとのがそのまま使へるとして、分配すべき耕地である。川島農場の地域にはむろん十分な餘裕がある。なほ草原であるところがあつて、平地山林があり、山地がある。しかし共同組合によつて開墾された熟田は、全部會員に分配され終つてゐる。残るは原野のみを

のである。

僕はそのことは大體原口からも聞いて来てゐた。僕は原野で結構だと言つた。扶養すべきものがほかにあるわけではない。原野をはじめから切り開いて、暮をうゑることからはじめようと言つた。そして地圖をひらいて、細谷と、土地を相した。細谷はそれでは氣の毒だ、と繰り返し言つて、土地の均等配分を受けはしたものの、今年の實際の様子から見ても、家族の耕作能力を越えて、困つてゐるところがあるから、相談してみようと言つてゐた。

その日は、細谷のところから小池のところへまはつた。小池は文字どほり雀躍して迎へてくれた。手をかたく握つて僕の部落復歸をよろこんだ。そして出来る限りの援助をすと言つてくれた。

次の日、僕は朝早く起きて、小池の自転車を借りて、村々を貫く道を、東へ東へと走つて行つた。進むにつれてあたりの風景はさびれたものになつて行つた。まだ九月だといふのにこの地方では秋はもうよほど進んでゐる感じだつた。實つてゐる稲の莖も細く腰が弱さうである。それでも今年は幸にかうしていいみりの様子を見せてゐる。じつにたくさん赤とんぼの群が、自転車で行く僕のまはりを、頭の上をどこまでも一緒に飛んでゆく。

その海への村へやがて自転車を乗り入れた時、ああこの村だ、と僕は、舊知に出逢つたやうになつかしい氣持がした。腹を見せた船や、干してある網などの間から、キラキラ光つた砂濱と、

海とが見えた。僕は湧谷甚七老人の生涯を思ひうかべながら、降つても照つても彼が海温測定のために舟をうかべたといふ、入江の方へ向つてベダルを踏んだ。

九

今僕は、妹とただ二人で、去年の春君が訪ねて来てくれた時と外見は全くおなじやうなくらしをしてゐる。

僕は開墾百姓だ。僕は、——いや、僕等二人は、朝暗いうちから、日ぐれまで、毎日原野を起してゐる。雪が降つていよいよ野良仕事が出来なくなるまでこれをつづける。起して、畝を割つたところへは、冬をしのぐことの出来る作物を植ゑて春を待つ。

今年の收穫はむろん僕等には何もない。次の收穫まで僕等はいはば居食ひしなければならぬ。去年共同組合から分配を受けたぶんがいくら残つてゐる。それから今年の春から秋まで、農場ではたらいで得た金が殆ど使はずにある。そのなかから營農に必要なものも出しながら次の收穫時まで二人の人間が食ひつなぎしてゆくことが出来るかどうか？　じつにむづかしいことだが、僕等はそれをやらなければならぬ。

部落の人々には僕を嗤つてゐる人もあり、同情してゐる人もあり、いろいろのやうだ。みんなと一緒に開いた土地を分けてもらへず獨力で新しくこれから荒地を開かねばならぬといふことに

對して氣の毒な思ひをしてゐる人があり、だから言はぬことぢやない、最初からみんなの行くと言つた方向に向へばよかつたのだといふ人がある。しかしどつちにしろ、僕に悪意を持つてゐるといふやうな人はない。それは高橋たちにしてもさうだ。この頃では僕は部落の一員として人々ときはめて靜かな、自然な關係を結んでゐる。

僕の氣持は以前とは變つて來てゐる。今の僕は意識の上でも行動の上でも、もはやどんな風な指導者でもない。またならうとも思つてゐない。僕は自分の意見を部落に廣く及ぼさうなどとは思つてゐない。従つて自分の考へによる新しい建設が行はれるといふ見通しが立たなければこんな部落にゐても仕方がない、などとはもう思はない。なんといふそれは、傲慢な態度であつたらう！ 農民たちはそんなことで部落を出たりはいつたりしてゐるのではないのである。どんなに自分の考へにちがふことがあつたところで彼等はそこで生きてゆくのである。諸方を食ひつめて來た素質のわるい人間たち、といふやうな考へ方ももうしない。これらの傲慢さはすべて同じひとつところから出てゐたことを僕は考へるのだ。

なぜ自分は村に生活を求めて歸つて來たかといふことを僕は絶えずかへりみる。すると僕はたとひどんな理由からにしろ、人々に教へたり、忠告したり、命令したりする氣持を全く失つてしまふ。いいことかわるいことかは知らぬ。しかしさういふことに平氣であつた以前の自分が遠いことこのやうに思はれるのだ。僕の希望はもはやさういふところにはない。僕の切實な希望はただ

農民の運命をそのまま自分の運命としたいといふことだけである。じつにたくさん人間が外から入れ代り立ち代りして來て、農民をいちつて行つたのである。やれあつち向け、こつち向け、と言つて、そしてそれを言つたものはただそれきりで、あとを引き受けず、どんどん通りすぎてしまふのである。そしてどういふ目に逢はうとも、農民はつねに變らず、そこにじつとさうしてゐるのである。僕は何よりも先づ、そこにじつとさうしてゐる、その一人になりたい。いちる方にはまはりたくない。

僕は自分といふものが非常に小さくなつて行くやうに感じられる。さうしてある大きな生活の流れの悠久さが強く感じられる。

農民の運命をそのまま自分の運命としたいといふ僕の願ひには、慟哭と祈りに似た氣持があるといふことを君は感じてくれるだらうか？

僕はこの頃益々深く自分の運命といふものを感じてゐる。運命を感じるといふことは一時代の矛盾を自分の一身において感じるといふことでもある。またそれは運命を愛するといふことでもある。

部落の人々は、長年の統制から自由になり、久しぶりに手足をのびした氣持で、元氣づいてゐるやうだ。彼等のその元氣はいつまでつづくだらう。僕にはその先は見えてゐる。やがて彼等も僕も共に苦しまねばならぬだらう。苦しみをわけ合ひつつ、そのなかからぬけて出ようとして協

力し合ふだらう。そして今度の協力こそは、僕の側から言へば、さきの日のそれとは全く違つたものであるだらう。その時はもはや僕はさきの日のやうな、中途半ばな存在として、ここにゐながら外からのもののやうに彼等のなかにあらはれるといふことはない。部落が立ちゆくもいかぬも、その時以後のことにかかつてゐる。やがて来るその日の憂いと喜びとについてふたたび、君に書く時のことを思ふのである。」

—了—



〔外地定價貳圓參拾壹錢〕

昭和十六年九月四日印刷
昭和十六年九月八日發行

定價貳圓拾錢
郵送料拾四錢

著者 島木健作

東京市牛込區矢來町七十一番地

發行兼印刷者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

會員登錄番號 一一二〇八七

電話牛込

(長) 八八八八
八〇〇〇五
九八七六
番番番番

振替東京八〇八番

東京市神田區渡路町二丁目九番地

配給元 日本出版配給株式會社

運命の人

東京市小石川區西戸町 富士印刷株式會社印刷

新潮社刊行の名著

夜明け前 島崎藤村著 各二、三〇
 破戒 島崎藤村著 送料、一六〇
 光を追うて 徳田秋聲著 送料、一八〇
 成吉思汗 尾崎士郎著 送料、一七〇
 人生劇場 尾崎士郎著 送料、一四〇
 空想部落 尾崎士郎著 送料、一三〇
 新橋坊っちゃん 尾崎士郎著 送料、一四〇
 子供の四季 坪田譲治著 送料、一四〇
 家に子供あり 坪田譲治著 送料、一四〇
 たをやめ 阿部知二著 送料、一六〇
 街 阿部知二著 送料、一四〇

光と影 阿部知二著 送料、一八〇
 放浪記 林芙美子著 送料、一〇〇
 十年間 林芙美子著 送料、一六〇
 女優記 林芙美子著 送料、一四〇
 曉の合唱 石坂洋次郎著 各一、五〇
 結婚の生態 石川達三著 送料、一四〇
 使徒行傳 石川達三著 送料、一六〇
 轉落の詩集 石川達三著 送料、一四〇
 智慧の青草 石川達三著 送料、一三〇
 人生画帖 石川達三著 送料、一五〇
 燃ゆる頬 堀辰雄著 送料、一四〇
 素足の娘 窪川稻子著 送料、一八〇

曆 壺井 榮著 送料、一七〇
 如何なる星の下に 高見 順著 送料、一八〇
 闘魚 丹羽文雄著 送料、一九〇
 太宗寺附近 丹羽文雄著 送料、一四〇
 家庭の祕密 丹羽文雄著 送料、一九〇
 第一義の道 島木健作著 送料、一〇〇
 簪 武田麟太郎著 送料、一八〇
 春扇 榊山 潤著 送料、一〇〇
 北の地平線 和田 傳著 送料、一六〇
 虹の工場 獅子文六著 送料、一七〇
 胡椒息子 獅子文六著 送料、一四〇
 東京温泉 獅子文六著 送料、一四〇

白蘭の歌 久米正雄著 送料、一〇〇
 大阪五人娘 藤澤桓夫著 送料、一七〇
 再會堤 千代著 送料、一六〇
 小指堤 千代著 送料、一五〇
 浅草の灯 濱本 浩著 送料、一四〇
 咲きだす少年群 石森延男著 送料、一四〇
 蕃界の女 中村地平著 送料、一五〇
 躍るスパイ群 山中峯太郎著 送料、一五〇
 愛情の門 眞杉静枝著 送料、一五〇
 軍事郵便 河内仙介著 送料、一五〇
 母は叫び泣く カアライル 高瀬 毅 譯 送料、一四〇
 新太閤記 吉川英治著 各一、五〇
 (全八册) 藤吉郎篇 上下 秀吉篇 上・中・下

○四・一 各價 集選作名新界世

▼ヘルマン・ヘッセ 高橋健二譯
放浪と懐郷

放浪を愛し、懐郷の念切なる人のよき魂の伴侶とならう。

▼ロツシエル 堀口大學譯
夢見るブルジョア娘

愛慾の團に於て女性に男性の支配下に立たねばならぬ？

▼スウイナトン 織田正信譯
ククタールン

婚期を過しかけた姉と、職業婦人の妹の運命と心理描寫。

▼ウイエルダア 伊藤 整譯
運命の橋

不慮の死をとげた五人の過去は如何なるものであつたか。

▼キヤサー 龍口直太郎譯
別れの歌

少女ルシーは別れの歌を聞いて人生の悲しみを知る。

▼トマス・マン 竹山道雄譯
混乱と若き悩み

前大戦後の一割過家路を描いた「混乱と若き悩み」他二篇。

翻譯書類

モンテラン 新庄嘉章譯
若き娘たち 價一・四〇

ヘルマン・ヘッセ 高橋健二譯
春の嵐(ゲルト) 價一・三〇

トマス・マン 平野威馬雄譯
ロツテ歸りぬ(上・下) 各一・九〇

H・G・カアライル 高瀬 毅譯
母は叫び泣く 價一・四〇

片山敏彦譯
新譯 ハイネ詩集 價一・四〇

阿部知二譯
新譯 パイロン詩集 價一・四〇

高橋健二譯
新譯 ゲエテ詩集 價一・四〇

916
44

終

